
だから君に

issei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから君に

【コード】

N9751U

【作者名】

i s s e i

【あらすじ】

はじまりのない終わり

「だから君に」

どんな魔法を使ったんだろうな、一夜にして夏服へと衣替えを終えた街並みに志木学は毎年のことながら目を細めた。木々が鮮やかな葉を繁らせているのは、わかっていたが街に飾られた巨大な水着のポスターや青を基調としたそのコーデイネイトは昨日まではなかったものだ。涼しげな画面の向こうで猛暑を伝えていたアナウンサーの言葉が木霊する。

「こまめに水分補給をしてください」

だから、というわけではないが鞆には「水分を失った体にGO」などという飾り文句のついたペットボトルを忍ばせている。コンビニの冷蔵庫で冷やされていたそれも、この暑さではすでにホットドリンクと変わらない温度になっている事だろう。額から噴き出す汗がそれを物語っていた。猛暑の夏休み、志木が勤めている貿易会社も他社と変わりなく、お盆のこの時期に社員に長期休暇とは名ばかりの一週間の夏休みが与えられている。

「日本人は働くのが好きなんだね」

皮肉のように話していた海外子会社の友人は勘違いしている、日本で働くのが好きなのは働きアリか蜜蜂くらいなもので、ただ日本人は主張できないのだ、休みみたいと。

それでも志木の夏休み計画に友人との旅行も里帰りも予定されていない。あるのはぼつかりと空いた時間だけで、それもすでに三日目に突入していた。街には旅行鞆を抱えた人の群れと、ここぞとばかりに娯楽を楽しもうと意気込む人の群れで溢れ続けているようだ。

去年の夏、一緒にその人の波を見て笑っていた元恋人がいない事が今年の夏休みに予定が入らなかつた一番の原因だと決めつけた志木は最寄り駅をくぐると、会社とは反対方面に向かう電車に乗り込ん

だ。

その駅で降りたのに理由はなかった。電車で見つけたポスターに惹かれたわけでもなければ、馴染みのショップがあるわけでもない。ただ、気が向いたから降りたのだ。この二日間がそうだったように、三日目の今日もそれに倣っていた。最寄駅から八駅分離れたその街にはサラダボールのような人の群れもなく、メインストリートだと思われる商店街は軒並みシャッターを下ろしているし、車道に車の駆動音もない。さらに不思議だったのは夏休みを楽しむ子供の姿どころか、声も聞こえない。人間の变りに軒先に吊るされた幾多の風鈴が輪唱し、鼓膜に涼しげな音を残しては消えていく。改札を一緒に出たはずの数人の人影も太陽の熱から逃げるようにいつの間にか志木の視界から消えていた。鞆から取り出したペットボトルは案の定ほどよいホットになっていたが、喉を潤すには十分だった。煙草を啜えながら街中を散策するも、ほとんど人とすれ違わないこの街はまるで期間が一年に延長されたラマダン中のイスラム圏内のようなだった。だから、唐突に背後から声をかけられた時志木の心臓は大きく二回飛び跳ねて、それを抑えるのに数秒を要した。

「今日はレイリヨウの日でしょ」

それと、と声を発した人物は志木の煙草を指さすと屈託なく笑いながら続けた。

「変わってないね、その銘柄も。でもここは歩き煙草禁止だよ」
久し振りに、その言葉を締めくくった人物を志木は見つめた。一重の切れ長の目元には青いラインが薄く引かれている。春先に芽吹いた桜から絞った様な色合いのワンピースはひざ丈で、風にそよそよと揺れている。

「あ、やっぱり覚えていないし」

覚えていない、というのが「レイリヨウの日」を指すのか目の前の女性のことを指すのか志木が思索していた次の瞬間に女性は手を伸ばしてきた。

「なんとなく、今日は会えるかなって思っていたんだ、そうしたら本当に学が歩いてくるからびっくりしたよ」

その手を繋ぐでもなくとっさに出た言葉は志木の心に渦巻く疑問をそのままぶつけていた。

公園のベンチに腰かけた女性は足をブラブラと揺らしながら、陽炎が浮かびそうな景色に目をやっている。志木の質問に笑顔を浮かべた女性に続くようにこのベンチに座った志木は、間を持たせるためだけに煙草に火をつけた。

「あのジッポーはもう使ってないんだね」

志木の手にある黒色のジッポー、それは一か月前の誕生日に自分で買ったものだが、それを見つめた女性は少しだけ、表情を崩した。紫煙を吐き出す。

「それで、君は…」

「学はさ、今日がレイリヨウの日だって覚えていた訳じゃないんだよね」

志木の言葉に被せるように女性がつぶやく。新雪のように白い頬が僅かに上がっている。

「いや、そもそもレイリヨウの日ってなにか、暑いからこそその冷涼とか」

知らずに敬語を使っている自分に苦笑いをする。隣に座る女性は志木よりも一回りは歳下に見える。志木の言葉に大きく頷いた女性は手に持っていたハンドバックから淡青色のジッポーを取り出した。その蓋を開け閉めすると独自の金属音が響く。

「これとセットで学がくれたのに、そんなジッポーに浮気しているとは思わなかった」

よくみれば女性の手元にあるジッポーは所謂恋人同士が買うようなマークの片割れが、刻印されている。そして、その刻印の下にローマ字で名前が彫られていた。

「これを君に？僕が？」

この女性が誰なのか、その問い以前に自分がこの女性を忘れていたという事実には志木は頭を抱えた。少なくとも仕事の同僚、というわけではなさそうだ。

「そうだよ、私の誕生日にくれたんだよ」

思い出してきたかな、からかうような笑顔で見つめてくる女性に志木は本当に覚えがなかった。この女性の顔を思い出そうとして、五年前までの元恋人の顔すべて思い浮かべたが一致する表情も記憶もない。

「君の誕生日は？」

その言葉にすつと瞼を閉じた女性は、ジッポアの蓋の開け閉めをやめた。

「うん、本当は分かっているんだ、学が私を覚えていないってことも、全部、今日だってこの街に来たのは偶然なんですよ」

雪解け水が女性の頬を伝っていた。それを見た学の声は、迷子になっていた。かけるべき言葉が見つからない。煙草の灰がゆっくりと下を向いていく。遠くの風鈴の音だけが聞こえる。この街では、レイリョウの日には蝉すらも鳴く事をやめているのだろうか。先ほどまで感じていたうだる様な暑さもいつの間にか引いている。

「あの時、私は学の言う事を聞かなかったのが駄目だったんだ、わかってる。だってちゃんと言うことを聞いていれば今だって学と一緒にいられたって思うから」

絞り出すように話した女性は地面を見つめたまま、息をしている。地面にできる小さな水たまりは乾くことなく、ぽつぽつと驟雨のように跡を作る。だから、志木はまるでずっとそうしてきたかのように、女性の髪を撫でていた。いまでは風鈴の音すら聞こえない。聞こえるのは目の前の女性から漏れる嗚咽だけ。脳内に木霊する「君は誰だ」の一言を飲み込んだ志木は、自分でも驚くほど優しい声を出していた。

「大丈夫だ」

しゃくりあげる声と共に、女性が繋げる。

「その仕草も、昔のままだ」

「そうか」

首を上下に動かした女性の呼吸は徐々に落ち着きを取り戻していた。髪を撫ぜる志木の手はその動きに合わせて、静かに動く。あやすように。そして、言葉までもゆっくりと。

「もう大丈夫、大丈夫だよ、ミサキ」

記憶のピースが、ひとつ顔を覗かせた。

その連絡を受けたのは志木が家についてから三十分後、正確には花崎ミサキに電話をしようと思った直前のことだった。寝巻のままの家を飛び出した志木は免許をとったのに合わせて購入したバイクに跨ると、月だけが道を照らす街道を走りだした。途中、二度、三度事故を起こしそうになりつつもたどり着いた路地裏に、ミサキは倒れていた。携帯電話を片手で握りしめたまま、力なく笑って。

「遅いよ、もう」

どうしてだろう、普段は真白いミサキの肌が朱色に染まって見える。

「ミサキ」

どうして名前を呼んだだろう。

「なによ」

返事をしたミサキは空いているほうの片手で志木の頬を撫ぜる。その手についていた液体はなぜだろう、赤い。つい一時間前に、よく似合うと褒めたばかりのワンピースが泥で汚れている。志木の頬を撫ぜる小さな手を、握り締める。ミサキは困ったように表情を崩す。

「そんなに強く握ったら、痛いよ」

それでも微笑んだミサキの腹部から止めどなく溢れる液体。どうして、なにが起きたんだ。遠くで誰かの叫ぶ声が聞こえた気がした。大きな人間が、なにかを話している。しかし、耳に聞こえるのはミサキの呼吸の音だけ。

「ごめんね、会いたくなっちゃんだ、バイバイした後すぐに…だから学の家我突然行って驚かせようと思って」

今日がすごく幸せだったから、そう続けたミサキの体を志木は抱き寄せていた。また誰かの声がそれを止めようとしていたが、関係なかった。わかつていたのだ、本当は、ミサキの喉に見たこともない深い切り傷があることに。声など初めから聞こえていなかったことも。ミサキの瞳が、そう話していた。地面に散らばったミサキの靴から飛び出た色とりどりの包装紙が、明日に迫った志木の誕生日を否がおうにも彷彿させる。涙交じりの声で、それでも目の前の無垢なままの女性に、志木は語りかけていた。

「馬鹿だなあ、ミサキ。明日になれば会えたじゃないか、今日はお前の誕生日、明日は俺の誕生日、素敵な二日間にしようって話していたじゃないか」

もはや握り返しているミサキの手の力さえ感じられない。だから志木は続けていた。聞こえるように、届くように。

「大丈夫だよ、もう大丈夫だ、ミサキ、明日一緒に素敵な一日を過ごそうよ、な、ミサキ」

志木のポケットから緩い曲線が刻印されたジッパーが地面に落ちるのと、ミサキの体から力が抜けたのはほとんど、同じタイミングだった。

気がつけば、青空の中心にいたはずの太陽は西に大きく傾いている。志木の腕の中で呼吸を続ける小柄な女性は、同じ感覚で呼吸を繰り返している。

「でもどうして」

記憶のピースが一つ見つかったのと同時に、どこに押し込んでいたのか分らない大切な記憶が留まることなく湧き出てきた。志木の言葉に女性は小さく首を動かすと、いたずらっぽく笑った。

「さて、どんな魔法を使っただけでしょうか」

今日のアナウンサーの注意は本当に当たっていた。いまでは体中の水分がなくなってしまうのではないかというほど、志木は涙を流していた。

「でも大成功だよ、最初はちつとも思い出してくれないからひやひやしたけど、やっと学の誕生日にサプライズができた」

いつかの微笑みを浮かべた女性、花崎ミサキは直後に俯くと小声で続けた。

「でも、明日になれば今日のことは忘れちゃうのが寂しいな、でもそれでいいのかもしれない、だって」

そこで言葉を区切ったミサキは志木の双眸を見つめる。夏にしては暖かな風が次に発せられた花崎の言葉をさらっていく。ああ、そうか。志木はようやく理解した。徐々に体温は上昇し、耳には聞き慣れた夏虫の合唱が響き始める。ふと公園に目を向ければ志木の身の丈の半分しかないような子供たちが駆け回っている。誰も座っていない公園のベンチに座りなおした志木は、なにもない空間を見つめると、呟いた。それはくすぐったいような、愛の言霊。返事のない世界で志木は、一人、微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751u/>

だから君に

2011年10月6日20時44分発行